

とある武偵の未元物質

victory

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【緋弾のアリア】と【とある魔術の禁書目録】のクロスオーバーです。クロス処女作。

一方通行との戦いに敗れた垣根帝督が深い眠りから目を覚ますと、そこは科学の街【学園都市】ではなく、武偵が活躍する街【学園島】であった・・・交わる事のなかった科学と武偵が交差する時物語は動き出す。

指摘点や感想、評価等聞かせて頂けたら嬉しいです！

拙い点もあるでしょうが、頑張っていきます！

目次

新たな武偵

第一弾	不可解な目覚め	1
第二弾	残酷な言葉	7
第三弾	最善の手	12
第四弾	新たな武偵 上編	18
第五弾	新たな武偵 中編	25
第六弾	新たな武偵 後編 I	33
第七弾	新たな武偵 後編 II	42
第八弾	新たな武偵 後編 III	51
第八・五弾	正体不明	66

新たな武偵

第一弾 不可解な目覚め

――似合わねエな、メルヘン野郎

――心配するな。自覚はある。

――オーケー。クソと一緒に埋めてやる。

――俺の【未元物質】^{ダークマター}に常識は通用しねえ！

――三下だな。美学が足りねエからそんな台詞しか出てこねエんだよ、オマエは

――そもそも俺とお前がどオーして第一位と第二位に分けられるか知ってるか

その間に、絶対的な壁があるからだ

――ムカついたかよ、チンピラ。これが悪党だ。

――y j k p 悪 w p

――そうか。・・・そういう事か！テメエの役割は・・・！

「・・・ちっ、最悪だな」

少し長めの茶髪の髪にホスト風の顔立ちとも形容される端正な顔を持つ少年、【垣根帝督】は開口一番そう呟いた。

ホント最悪だな・・・

思い返す事すら忌まましいあの出来事を夢にまで見るとは・・・あの日、俺は【アレイスター】との直接交渉権を得る為に【一方通行】^{アクセラレータ}と戦い、そして敗れた。

抜かりはなかった筈なのにな・・・

【ピンセット】の回収、未元物質による一方通行の攻略までは上手くいっていた。だが、上手くいったのはそこまでだ。それから先は、一方通行による未元物質の攻略、一方通行から発生した黒い翼・・・それを見て未元物質のなんたるかを理解したものの、最後は押し迫る黒い奔流に飲み込まれた・・・

「・・・つつーか、ここどこだ？」

忌ま忌ましい記憶に苛立つ気持ちを抑え、垣根帝督はベッドから身を起こし周囲を見渡す。

彼がいるのは白を基調としたこじんまりとした簡素な部屋だ。

そのこじんまりとした部屋にあるのは、小さな窓、白いカーテン、椅子と棚・・・そして彼が今使用しているベッドのみ・・・

それらの視覚情報からここがどこかの学区の医療施設ないしは病室かなんかだろうと結論付ける。

「・・・いや、待て」

そう結論付けたもののどうも腑に落ちない。

今更だが、俺は何故無事でいる？

あの時、俺は一方通行に敗れた。

文字通り一方的に叩きのめされた・・・押し迫る黒い奔流に飲み込まれた際に聞こえたのは俺の身体が潰れる音。死を予期した筈だ。

あの忌ま忌ましい出来事を夢に見る状況すら訪れない筈だ。

身体を動かしてみるとやや軽い痛みはあるものの、なんの支障もなく動いている。

得に目新しい傷はついていない。

待て待て!?!可笑しいだろ!?!

確かに学園都市には【冥土返し^{ヘウシキヤンセラ}】っていうブラックジャックも

真っ青な凄腕の医者がいるって話だが・・・そんな奴でも出来る事と

出来ねえ事があるはずだ！科学の世界にも不可能という言葉は必ず存在するもんだ！

一命を取り留めた俺を仮に冥土返しが執刀していたとしても『手術痕もなく、潰れた身体を何事もなかったかのように元に戻す』

なんて事出来る訳がねえ!!

ならどうして!?!何故!?!

今の状況を理解しようとするが、理解出来ないものは理解出来ない。情報が全くない。記憶も曖昧な部分が多い。

理解出来たのは、ここがどこかの病室である事と自分が生きているという事実のみ。

「ちっ、まあいい。後で裏の連中に問い詰めりや分かるこつたな」

はっ、俺とした事がこんな事で取り乱すなんて情けねえ・・・

なんて事を考えながら今出来る事を行う為に俺は視覚情報以外の情報を得る為に未元物質を発動させる。

いつものように発動する自身の能力に僅かばかりだが、安堵する。能力が発動し、周囲の状況を探りに取り掛かる。

だが、どうもおかしい・・・

能力は発動しているが、演算の乱れに加え妙なノイズが生じている。また、形容しがたい違和感を感じる。

学園都市らしからぬ雰囲気を感じている。まるで、学園都市とは違う地にいる、そんな気に陥ってしまうような奇妙な感覚だ。

「はっ、情けねえ」

病み上がりの影響かなにかだろうと思いついて、学園都市に存在する能力者の中で7人しかいない超能力者の第二位として君臨し続けてきた、絶対的な自信を持っていた俺の思いも寄らぬ不甲斐なさに思わずそんな言葉が零れてしまう。

しかし、いつ他人が来るか分からないこの場で目立つ事をするのはどうかと考え直し、能力を解除し、ふと気になったことを思い出した。

「そっかや・・・あれからの位だった?」

あの日・・・アレイスターとの直接交渉権を得る為の一件、つまりは一方通行に敗れたあの日からの位たったのか・・・それを確認する為、俺は先程周囲を確認する際に壁に電子式カレンダーがあるのは確認していたので、改めてそちらを見てみる。目を寄越した電子式カレンダーにはこう表示されていた。

『2009年4月8日』と。

「・・・・・・・・・・どういう事だ、オイ」

そんな言葉しか出て来ない。

垣根帝督に吐き気と動悸が襲いかかる。

「・・・・・・・・・・どういう事だ、オイ!!」

二度も同じ言葉が出てしまうが、それほど垣根帝督は動揺していた。先程不可解な自身のおかれた状況に動揺した際とは比べものにならない程。

どういう事だ、オイ・・・

洒落になんねえし、笑えねえぞ!!

俺が一方通行と殺りあったのは10月だぞ!?

それが・・・今が4月!?!馬鹿いな!?

ありえねえだろ!!

垣根帝督が一方通行に敗北を喫したのは10月9日。

そして電子式カレンダーに表示されている現在の日付は4月8日。4月と10月・・・半年近くの期間の差がある。だが、彼が動揺しているのはそこではない。半年近く眠っていた訳ではない。なら、何に彼は動揺したのか？

問題なのは垣根帝督が一方通行に敗れた日が『2009年10月9日』であり、電子式カレンダーに表示されている現在の日付が『2009年4月8日』である事だ。

この事が意味する事、それは垣根には受け入れがたい事だ。いや、垣根でなくともだ。

「俺の記憶違いか・・・!? いやいや、んな訳ねえ!？」

あの一件は学園都市の独立記念日に行ったのは間違いない!!」

だが、手術やら入院やらでスケジュール管理が徹底されている医療施設が間違った表示のカレンダーを置くか!? 置かねえだろ!？」

落ちつけ! 落ちいて考えろ! 冷静さを失うな!!

クール、クールな俺に戻れ!

そう自身に言い聞かせるが、こればかりは落ち着いてはいられない。い。

「どういう事だ、オイ!!」

理解出来ない状況が重なり苛立ちから声をあげ、怒鳴り散らしながら近くにあったごみ箱を蹴り飛ばす。

ゴン!!

とごみ箱は壁に当たると少量だが、中に入っていた紙ぐずやら何やらを零しながら床を転がる。

「はっ」

転がるごみ箱を見て垣根は自嘲気味に笑う。

訳わかんねえからって物にあたるなんてただのガキじゃねーか。違うだろ・・・垣根帝督って人間はそんな奴じゃねーだろ・・・ガキなんて生易しいもんじゃ・・・

等と理解出来ない自分の状況に苛立ちを感じるものの幾分か冷静さを取り戻すと、ふと病室の外からこちらに近づく足音が聞こえてく

る事に気付いた。

つべーな、大方、さっきのごみ箱を蹴り飛ばした時の音か怒鳴り声に誰かが気付いたって所か？

そうこうするうちに扉の前で足音は止まり数回のノックと共にこちらの返事を聞くまでもなく扉は開かれた。

「病室で騒ぐとか暴れるとかあんた、馬鹿なの？常識がないの？どっちなの？」

見た目20代前半く30代前のやや危うい雰囲気を漂わせた女性は開口一番そう言い放つのであった。

この女性との出会いが後に垣根の人生の分岐点になることになるのだが、この時の垣根にはまだ、知るよしもなかった。

続く

第二弾 残酷な言葉

「病室で騒ぐとか暴れるとかあんた、馬鹿なの？常識がないの？どつちななの？」

ノックの返事も聞かずに扉を開け中に入ってきた女性はそう言った。

垣根は入ってきた女性を一瞥する。

誰だ・・・こいつ？

女性なのは間違いないが、女性らしさはあまり感じられない・・・言葉は悪くなるが、どこかラリったような雰囲気は漂っている。また、この場に不釣り合いというか、こういう場ではまず見かける事がないであろう、煙草のような物を口にくわえている。

少なくとも垣根が見知った人間ではない。

だが、どれくらい的事を知っているかは分からないがこいつは俺を知っているような口振りだ。

「・・・・・・・・」

さて、どうしたもんかと垣根は考える。

少なくとも裏側の人間ではねえな・・・

俺を含めた裏側の人間独特の雰囲気はしねえ・・・

表側の人間だろうが、俺を少しは知っているみてえだ・・・全てを探り出す必要はないが、こいつから何かしらの情報は掴めるか？

「病室で暴れるとか常識がないの？」

「待って待て!?!病室で煙草(?)くわえてるテメエに常識どうこう言われたかねえ!?!」

「何言ってるの?くわえているだけで火はつけてないから問題はないはずだけど・・・大丈夫?」

このアマ・・・今の大丈夫ってのはアレか？

頭大丈夫って意味か!?!ムカついた!

「まあ、そんだけ口聞けるようなら大丈夫そうだね」

その女性はそう呟くと椅子に腰掛ける。

垣根は椅子に腰掛けた失礼な女性とどうしたもんかと考えるが、今とはかく情報が欲しいとの結論に至り

女性に合わすようにベッドに腰掛け女性と対面する。

「あんた・・・俺の事知ってんのか？」

「いや、詳しくは知らないけど？あんたの名前が垣根帝督ってくらいしか知らない。あと目上の人間に向かってあんたとは口の聞き方になってないぞ」

「いやいや、あんたの名前知らねえから仕方ねえだろ!？」

「ああ、そうだったね・・・私は綴、綴梅子だ」

「そうかい、綴さんよ。何故俺の名前を知ってたんだ？」

「あんたが唯一身につけていた持ち物、財布の中にあつた学生証を勝手に見させてもらったからね」

「・・・ほう」

学生証ねえ・・・そういや、そんなもん入れてたっけな・・・学籍だけ入れてあり通いもしない学園都市でもトップクラスの高校、「長点上機学園」の学生証。

ロクな情報が記載されている訳でもねえ。

記載されているのは、俺の名前と顔写真、高校名や学区名と記号で記載された所在地だけの簡易な学生証。

綴の口振りからすると、こいつは第一発見者あるいはその関係者、または医療機関の人間か何かか？

つっつか：俺が唯一身につけていた持ち物ってこいつが言つたって事は携帯はないって事じゃねーか・・・

ちっ、携帯さえありや【心理定規】^{メジャー・ハート}やら他の裏の連中とも連絡が取れるんだが・・・まあ、他の奴との連絡はこいつ、綴って奴から情報を聞き出した後どうにかすりゃいい。

やや平静さを取り戻した俺がこの女から聞きだすべき情報を整理している

「しかし・・・長点上機・・・垣根帝督ねえ」

綴はそう眩くと何か訝しむような目でジツと俺を見てくる。

マズツたか？いや、高校名や名前だけじゃ何も裏の情報は掴めねえ筈だ。だが、この女の訝しむような目はなんだ？

「どーした？」

やや生じた動揺を隠しなるべく平静を装い綴に問い掛ける。

「いや・・・何も。身体は大丈夫なの？」

「あ、ああ・・・身体は問題なく動く」

「そ。何があつたか覚えてる？」

「いや・・・気がついたらこの病室だったからな。正直、今一分かつちやいねえな」

覚えているような覚えてないようなそんな感覚だが、正直に『一方通行と殺りあつたところまでは覚えている』と言えば、こいつは身構えるだろうし、情報を聞き出せなくなると判断し、曖昧に答える。

最も嘘は言っていないがな。

今一分かつていないの事実だからな・・・

というよりも正直、こいつから聞きたかつたのはそれ等の情報だ。

「ふーん・・・まあ、最近は【武偵殺し】やらその模倣犯やらもあるしね。そんな中で路地裏で倒れているあんたが発見されたときで、少し気になってね」

「そうか」

そうかと流したものの・・・よく分からねえ。

【ぶてーごろし】ってなんだ？

言葉から察するに【ぶてー】と【殺し】なんだろうが、【ぶてー】なんて言葉聞いた事がねえ。

路地裏で倒れていたのは、一方通行と殺りあつたのも似たような場所だ、今は気に泊める必要はねえ！

いつからこの病室にいるかだとかも気にはなるが・・・

今は聞き覚えのない【ぶてー】という言葉が気になる。

聞き覚えのない言葉に戸惑っている垣根を知ってか知らずか、マイペースに綴は言葉を続ける。

「今朝も【武偵高】の生徒が【武偵殺し】の模倣犯らしき奴に狙われたらしいし。もしかしたら、あんた・・・垣根も巻き込まれたかなにかなだと思っただけだ」

待て待て・・・【ぶてーごろし】やら【ぶてーこう】？

さつきから聞き覚えのない単語がホイホイ出てきやがる。どうなってんだ!?

「待て待て、【ぶてー】だの【ぶてーごろし】だの【ぶてーこう】だのなんなんだからそれは!？」

綴にそう問い掛ける。

俺はガキの頃から・・・記憶の中じや10年以上前から学園都市にいるが、【ぶてー】だの【ぶてーこう】だの聞いた事がねえ。にも関わらず、この女・・・綴はさも当たり前のように使っている。

先程から・・・目が覚めた時から感じていた違和感が殊更強まってくる。

綴にそう問い掛けると、先程まで訝しむような・・・何かを探るような目を止め、どこか呆気にとられたような表情に変わりやがった。

なんなんだ？

「その目・・・挙動・・・反応・・・そうか、あんたは無関係か」

「あ？」

「いや・・・何でもないよ。武偵っていうのは・・・【武装探偵】の事だけど・・・本当に大丈夫なの？顔色悪くなってるぞ？」

【武装探偵】・・・略して【武偵】

なるほど・・・言葉の意味はなんとなくだが、分かったが・・・やはり聞き覚えがねえ・・・

そもそも学園都市に探偵なんていんのか？

いねえだろ・・・【風紀委員】ジャックジメントや【警備員】アンチスキルで充分事足りる筈だ。

能力による周囲の状況の確認時に感じた妙な違和感、嫌な予感が確信めいたものになってくる。

少し前から始めた冷や汗が止まらなくなってきた。綴の言う通り、俺の顔色は本当に悪いのだろう。鏡がないので顔色等分か

りやしねえが・・・寒気と吐き気がし始めた今の俺の精神状態を考えりやそういう事なんだろうよ・・・

だが・・・僅かばかりの・・・一縷の望みをかけて綴に女は問い掛ける。

「綴・・・一つ確認だ。ここは・・・学園都市でいいんだよな・・・？」
今まで抱いていた疑問・・・

一方通行に敗れた筈の俺が何故無事でいられたのか・・・無傷でいたのか・・・俺の記憶と現実の時間に齟齬がある事等はこの際構わないが・・・この嫌な予感・・・違和感だけは勘違いであってくれ・・・
確信めいたのも俺の思い過ごしであってくれ・・・
柄にもなく縋るような思いで綴に問い掛ける。

「学園都市って・・・何言ってるの？垣根・・・ここは人工浮島・・・

【学園島】でしょ？」

そんな俺の思いと現実とは酷く掛け離れ、返ってきた言葉は残酷で非情なものだった。

学園都市じゃない、だと・・・!?

続く

第三弾 最善の手

綴の言葉を受けて垣根は腰掛けていたベッドから起き上がると、窓の側まで行きカーテンを勢いよく開ける。

遮る物がなくなった窓の先に見えたのは、ビルが建ち並ぶ外の景色。ビルが建ち並ぶ姿は垣根が暮らしていた学園都市となら代わり映えのない景色だった。

ビル群までは学園都市と代わり映えしない・・・

だが、その遥か先にうつすらと見える『ある景色』を見て垣根は自身が感じた違和感や綴の言葉が真実である事を理解する。

ここは学園都市ではないのが、事実だと・・・

ビル群の遥か先に見えたものが、学園都市ではありえない物なのでから

学園都市・・・東京西部気位置するあらゆる教育機関や研究組織の集合体である。学生が人口の8割を占めており外部より数十年進んだ最先端科学技術が運用されている科学の街だ。また、その進んだ科学技術荷より、人為的な超能力開発が学生全員に実施され、実用化までに至っている。その進んだ科学技術や超能力開発は秘匿性が高い。その為、外周さ高さ5m以上、厚さ3mの『壁』に阻まれ外部とは完全に『隔離』されている。

海に浮かぶようなビル群の遥か先に見えるのは、外部と完全隔離された学園都市に存在しえないもの・・・

【レインボーブリッジ】そして青の景色、【海】。

レインボーブリッジの南に浮かぶ人工浮島、通称【学園島】。学園島では、これらの景色は見慣れたもののだが、垣根にとっては見慣れない景色であり、微かな希望をも打ち破る残酷な景色に見えた。

オイオイ・・・どうなってんだ!?

気がついたら身体に痛みはあるが傷一つなく生きてるし、俺の記憶と現実の時間に齟齬がある・・・それに加えて学園都市ですらねえだ

と・・・!?

どういう事だ・・・オイ!?

明らかに動揺した様子でフラフラとベッドまで戻り座り込む垣根。

「・・・・・・・・」

「・・・・そういう事か」

綴が俺を見て何やら呟いたが、正直どうでもいい。

目が覚めた時は違和感や現実、事実の確認は裏の連中にすれば良いと思っただけだが、ここが学園都市でないとすれば不可能だ。

「ちっ」

今自分がおかれている状況をいくら考えても答えは出る筈もなく、苛立ちから思わず舌打ちが出てしまう。

「なるほどね・・・思ってたよりは良かったんだけどね・・・」

そんな苛立ちを隠せない俺を見て綴は何やら呟く。

「あ?どうした?」

苛立ちを隠せない為か、やや荒い言葉遣いになってしまおうが、仕方ねえだろ・・・

「いや、私の懸念が外れて良かったと思っただけ。でも・・・垣根、あなたの状況は深刻そうだ」

懸念ね・・・綴がこの病室に入ってきた時から訝しむような視線を送ってきたが・・・先程のいくつかの綴の言葉を思い返すと、察しはついた

「はっ、テメエの懸念ってのはアレか?武偵殺しだの模倣犯って奴に俺が関与してるかもしれないねえ・・・って感じか?」

「まあ、大体そんなところだね。武偵殺しは捕まったけど、その模倣犯が最近出てくる中で見知らぬ人間が路地裏で『血まみれ』で倒れているんだ。それも『無傷』でね・・・なんらかの事件か武偵殺しの関連の筋で疑うのはおかしい事じゃないでしょ」

綴は俺の返しに驚く事もなく、淡々と語る。

「疑っていた割には妙に馴れ馴れしい口調と露骨な武偵殺しに関する話があったのは?」

「もし模倣犯が意識を取り戻した直後に武偵殺し関連の話をされた

ら、動揺すると思つてね」

まあ、するかもしれないねえな・・・

「目が覚めた早々に疑つてかかられるのは気が悪い話だ」
綴を睨む。

綴の言葉尻からして例の武偵、あるいはそれに近い職にあるのだろう。

捜査の一環であれば綴のやっている事はおかしくはねえ。最も、武偵殺しつて奴がなんなのかは知らんが

だが、こつちは目が覚めたら見知らぬ土地で時間のズレな何やらで自分の置かれた状況にパニックつてんだ

「悪い事はしてないと思うぞ?」

半ば開き直るような口調の綴。

まあ、そんな怪しい奴は疑つてかかるのが妥当だわな

「はっ、中々ふてぶてしい奴だな、テメエは」

「で、あんたの様子から懸念はなくなったけど、あんた自身がマズイ状況にあると分かつて頭を痛めてるんだよ、私は」

「・・・頭を痛めてるようには見えねえぞ・・・」

「失礼な事を言うね垣根。あんたは、武偵すら知らなかったり、『ここは学園都市か?』みたいな事を言い出す・・・」

一縷の望みをかけて聞いたんだが、その望みをぶち殺したのテメエだ、綴。

「残念な奴に見えたか?」

「まさか。ただ、残念な結果になったのは事実だけどね・・・」

「あん?」

「記憶喪失とかの類ならどうにか出来たかも知れない。対策は取れた。けど、あんたの様子や口振りはそんな生易しいものじゃなさそう
だ」

「それはどういうこつた?」

「あんたは・・・まるで違う世界から来たかのような口調、雰囲気、動揺だった」

「こいつ・・・ラリった見た目に反して中々の曲者じゃねーか・・・」

「その表情・・・どうやら私の予想は間違いなさそうだ」

「・・・これは演技って線は考えねーのか？」

「私はこうみえて武偵高で尋問科の教師もやっている尋問のプロだ。挙動や言動、表情から相手が述べた事が真実か虚言か位見分けられる。」

口調や表情からあんたが虚言を吐いてない事は既に分かっている。あんたは珍妙な事を言い出した。今更そんな演技をしても無駄だし、演技してるつもりならあんたは大した大根役者だ、垣根」

尋問科ってなんだよ？

教育機関が教える事じゃねーだろ!?

尋問のプロってなんだよ、大根役者じゃねー

だの突っ込みたいことは色々あるが、このアマ・・・思っていた以上により手のようだ。

「何があつたか言えるか？」

さて、どうしたもんか・・・

学園都市の事や事実を全て話すのは気が引けるが、現状分からねえ事だらけだ。

見知った人間がいねえここで今唯一の情報源となる奴はこいつしかいねえ・・・幸いこいつは今の俺の現状を少しは把握している・・・と、なると

俺は綴に事情を話す事にした。

話した所でこいつにどうこう出来るとは思わねえが、今はそれしか打てる手がねえからな。

俺が科学の街、学園都市にいた事。

一方通行と殺り合った事は伏せ、とある抗争に巻き込まれ、気を失い目が覚めたらここにいたと話す。

俺の話を聞き終えた後の綴は狐につつまれたような表情にはなつたものの、俺の話は信じたようだ。

一方、俺は綴から情報を聞き出す。

学園島や俺が学園島で発見された時の事、武偵の事・・・そして、学

園都市の存在について・・・

そして、綴から聞き出した話をまとめるとこうなる。

1—ここはレインボーブリッジの南に浮かぶ人工浮島であり、通称【学園島】。学園島は武偵を育成する総合教育機関である。

2—武偵、武装探偵とは凶悪化する犯罪（どの程度凶悪なのかは知らねえが）に対抗して新設された国際資格。これを取得すると警察に準ずる活動が出来るらしい

3—超能力開発と科学の進んだ街、学園都市は【存在しない】。綴の携帯電話を使い検索をかけても、『教育機関の集合体』やら『●●学園都市』だのといった情報しか出てこねえ。いくら、俺がいた筈の学園都市が外部とは隔離されているとはいえ、ある程度の・・・出しても差し支えない程度の情報は開示されている筈だ。科学の街、学園都市が検索に全く引つかからねえ、なんて事は本来ありえねえ。

4—俺は5日前に学園島のとある路地裏で血まみれで倒れていたらしい。無傷だったそうだ。それを「トーヤマ」って奴で「ミネ」って奴が発見し武偵高や医療機関に連絡わや入れたらしい。たまたま連絡に出たのが、綴だったそうだ。

5—綴は東京武偵高で教師をやっているらしい。尋問科らしい。また、武偵高は世界各地にあるらしく日本にもいくつかあるらしい。

6—今日が2009年4月8日である事に間違いはない

「・・・・・・・・」

言葉が出てこねえってのはこういう事を言うんだな。

ある程度の覚悟はしていたが、これはキツイぞ・・・

学園都市が存在しない事が絶望的だ。

学園都市が存在してりゃ、まだ打開策は考えられたかもしれねえが、分からねえ事の方が多い現状で頼みの綱が無くなってしまいうなんてよ・・・

「・・・・・・・・」

綴は綴で俺をジツと見つめ何やら考え込んでいやがる。まあ、奴の

事情も分かるっちゃ分かるがな・・・

武偵殺しとやらの模倣犯に関連する人物と疑ってた奴が、『存在しない場所から来ました』なんて宣ってよだ、そうなるわな・・・

だが、実際どうする？

今の俺に出来る事なんざほぼ皆無だ。

見知らぬ土地で見知らぬ人間ばかり・・・知らない事ばかりなのが、今の俺の現状だ。

学園都市じよら大抵の事はどうにかしてきた、振じ伏せてきたが・・・ここで俺に何が出来る!?

そもそもの元凶を知ろうにも知る為の手段がねえ!?

どうする!?! どうする!?! どうする!?!

焦燥感や絶望に駆られていると、先程まで黙り込んでいた綴が口を開いた。

「垣根・・・」

「あ!?!」

どうしようもない現実から出る苛立ちを隠せず荒い言葉遣いになるが、知ったこっちゃねえ!

「今から言うのは決定的な打開策とは言えないぞ?だが、今のあんたが元凶を知る、学園都市とやらに戻る方法を知るにはこれしか手がなさそうだから言うぞ。いわばあんたが打てる最善の手だ」

「勿体ぶってねーで話せ」

要件を中々述べず御託を並べる綴に苛立ち、その最善の手とやらを話せと綴に促す。

俺の言葉を聞いた綴は俺を真つすぐな目で見つめると最善の手とやらを言う。

「あんたが今打てる唯一の手、最善の手は・・・武偵になる事」

・・・このアマ、何言ってやがる・・・?

続く

第四弾 新たな武偵 上編

「あんたが今打てる唯一の手、最善の手は・・・武偵になる事」

「は?」

このアマ・・・何言つてやがる・・・?

「は?って聞いてなかったのか?」

「いや、聞いちゃいたが・・・」

「今の垣根に出来る事は限られている。元いた場所、つまりは学園都市とやらに戻る為の手掛かりや元凶を掴もうにも出来る事に限りがあるからね・・・。けど、武偵になれば・・・権限や活動範囲は劇的に増える。希薄な可能性を少しでも高める事が出来る」

綴の言っている事は最もだ。

見知らぬ土地や見知らぬ人間・・・見知らぬ世界にいると言っても過言ではない、今の俺が出来る事なんざ限られている。元凶や手掛かりを掴もうにもその可能性はかなり希薄だ。

だが、武偵になれば手段や可能性は増える。

この世界では、武偵になる事で活動範囲も出来る事も劇的に増えるらしいから・・・

「まあ、このまま特に策もなく一人で可能性が少ない道を選ぶか・・・武偵となって少しでも可能性の高い道を選ぶかは・・・あんた次第だよ、垣根」

学園都市では暗部組織【スクール】のリーダーとして、【統括理事会】や他の上層部の連中からの指令を受け、学園都市の【不要な人間】^{屑やゴミ}を始末する悪党だった俺が、それしか手段がねえとは言え正義の味方ともいえる武偵になるなんてのは奇っ怪な話だ。

だが・・・

「確認したい事がある」

「なに？」

「武偵つてのはすぐになれるもんなのか？」

「資格を取得すればなれるさ」

「そうか」

学園都市での俺を知る人間が、今の俺を見たら笑うだろうな・・・くそつたれの悪党、外道の俺が・・・正義の味方、それが最善とはいえ、武偵への道を提示されてんだ・・・自分でも可笑しい位くらいだ。

だが・・・

「武偵高には入る必要はあるけどね」

正義の味方、武偵なんてのは柄にあっちゃいねえ・・・悪党の俺には不相応だ・・・

だが・・・

「専攻する科によって危険も高くなるけど・・・あんたがここに来てしまった手掛かりを見つけられる可能性はその分高くなる」

学園都市からこの学園島に飛ばされる形で今の俺がいる。

なら、少なくとも元凶はこの世界にいる筈、あるいはある筈だ。

なら・・・

「資格？取ってやろうじゃねえか！武偵高？入ってやろうじゃねえか！危険？上等じゃねえか！」

柄じゃねえ、可笑しいだろ？なんて感情は捨て置く。

今の俺を見て笑う奴は笑わせておけばいい・・・愉快的死体オブジェに変えてやるがな。

危険？くだらねえな・・・

この俺を誰だと思っただやがる？

垣根帝督だぞ！

「なってやろうじゃねえか！武偵とやらに！手掛かりを掴むまではな」

「なってやろう、とは随分上から来たのは気になるけど・・・まあ、いいさ。覚悟は決まったみたいだね」

綴は呆れたような少し表情になってはいたが、小さな笑みを浮かべ

ると、綴は紙きれと何やら資料を手渡してきた。

【東京武偵高】とやらの資料であり、紙きれには綴の連絡先が書かれている。

「近いうちに、ここに来なよ。例外的、特例で編入試験を設けるから受けに来い。特例だからチャンスは一度きりだけどね。落ちたら落ちたで、あんたはそれまでだったって事だ。」

「そうか・・・近いうちに、な。あと、落ちるとは思ってたねえから心配するな」

言うも綴は苦笑いした後何故か怪訝そうな目で俺を見てくるが気にしない事にした。

「つつーか・・・自分で言うのはなんだが、俺は怪しい奴だぞ？ そいつにここまでする、無用心にも連絡先まで教える理由はなんだ？」

武偵高の資料や綴の連絡先が書かれた紙に目を通しながら綴に聞いてみた。

正直、理解出来ねえ・・・

綴の提案は確かに俺が取れる選択肢の中で最善の手で、それで俺も綴の提案に乗る事は決めた。

その事自体はありがてえが、例外的措置を設けようとしたり連絡先まで教える必要はないと思う。

ましてや他人から見たら俺はこの世界じゃ存在しない土地から来たとかなんとか宣っている痛々しい奴だろう。別に俺は痛々しい訳じゃねえがな・・・

そんな痛々しい奴に最善の案を提示するなんて普通しねえだろ・・・

俺が綴の立場なら武偵殺しとやらに関与してない時点で用済みだ。そいつがどういう状況におかれていようが関係ねえ。聞きたい情報だけ聞き出したらそこで終わりだ。そいつその後、どうなろうが関係ねえし、興味もねえからな・・・だが、綴は俺を見捨てる事をせずの特例の措置まで行うときた。そこまでする理由が俺には分からねえ・・・

「武偵憲章第6条」

俺の問いに対してそう綴は答えた。

「はっ。」

聞き覚えのない言葉が耳に入り思わず

間抜けな声を出してしまった。

憲章の一つーからには、武偵の取り決めか何かか。

「武偵憲章第6条・・・『自ら考え自ら行動せよ』

それに則っただけだよ。私は私がそうした方が良かったからそうした。垣根みたいな怪しい奴は近くに置いておいた方が野放しにするよりも良いと思ったからね。ある種の監視の意味合いが強いな。それと私も武偵である前に一人の人間だ。垣根の状況を知り手を貸したい、と思っただけさ。あとは・・・単純に垣根に興味があったってのもあるね」

なるほどな、怪しい奴、危ない奴は放置するよりもある程度の監視下あるいは管理下ね置く方が良い・・・野放しにするよりもリスクはその方が低いからな。何かあればすぐに対応出来る点大きいしな。

綴、又ボットとした顔の割にや中々考えてるじゃねえか・・・だが、単純な善意だけでない好感が持てる。

最も、大人しく管理されてやるつもりはねえがな・・・

「さつきも言ったけど資格が取れなければそれまでだけどね・・・さて、そろそろ私は帰るぞ」

綴はそう言うのと椅子から立ち上がり扉に向かって歩き始める。

扉に差しかかった辺りで綴はこちらに振り返ると、

「武偵高で待ってるぞ。そして、健闘を祈る」

そう言い残し、綴は去っていった。

綴が去り、5日ぶりに目が覚めたとやらで検査だのなんだの夕食だのを済ませた俺は今、武偵高の資料に再び目を通してている。

どうやら武偵高の生徒は、一定の訓練期間の後いきなり依頼を受ける事が出来るそうだ。それら依頼と試験の結果に基づいて生徒にA～Eの『ランク』付けが行われるらしい。また、Aランクの更に上、Sランクもあるらしいが・・・ランクがどうこうってのは学園都市のシステムとあまり変わりなしねえな。

ちなみに学園都市でも学生は6段階でランク付けされる。

1v0（無能力者）から始まり、1v1（低能力者）1v2（異能力者）1v3（強能力者）1v4（大能力者）そして、頂点であり230万の学生で7人しかいない1v5（超能力者）。俺も1v5の第二位だ。

ランクは高ければ高い程活動範囲も広くなり依頼内容も変化するようだ。

学科も色々あるみてえだな。

【強襲学部アサルト―強襲科】：近接戦による強襲逮捕を習得する学科。日常的に激しい戦闘訓練があるらしい。

【探偵学部インケスタ―探偵科】：探偵術と推理学による調査・分析を習得する学科。外部からの依頼もあるみてえだ。

【研究部リサーチ―

超能力操作研究科S】：超能力・超心理学による犯罪操作研究を行う学科。サイコメトリーやダウジング等の超能力者操作がメインの学科。

とりあえず目を引いたのはその3学科だけだな。

他にも学部や学科は【強襲学部―狙撃科スナイプ】やら【諜報学部―尋問科レザード】やら他にもあったがさして興味はない。

俺が目指すべきランクは決まった。専攻する学科も決まった。

特例の試験がどんな内容なのかは分からねえが、俺は武偵にならなきゃならねえ……

そう思いつつ、俺は眠りについた。

続く

第五弾 新たな武偵 中編

くくく東京武偵高・応接室くくく

現時刻16:00

「垣根……確かに私は近いうちに来いとは言ったぞ？言ったな？言っただが……」

綴はこめかみに手をあてながら言う。

前回会った時と同様、煙草のようなものをくわえている。

どうでもいい事なんだが、綴はヘビースモーカーだったりすんのか？いや、つつーかよくよく見て見りや煙草みてえな何かじゃねーのか？アレは……明らかに非合法な匂いがぷんぷんしやがる。まあ、俺にはあまり関係ねえけどよ。

「なんつーか、似合わねえな……その仕草。どうでもいいんだけどよ」

「放つといてくれ。あと、どうでもいいなら言わなくていいでしょ」

俺の発言が不満だったのか、ややむくれた顔つきの綴だったが一度溜息を吐くと言葉を続ける。

「じゃなくて、確かに私は近いうちとは言ったが……何故今日来るんだ？アレから一日しか経ってないぞ」

綴は呆れたような口調で相変わらずこめかみに手をあてながら言う。

確かに綴の言った通りあの話を受けてから一日しか経っちゃいねえが……何か問題あんのか？

「近いうち、じゃねえか」

俺はおかしな事なんてしちゃいねえし、言ってもねえぞ。綴の『近

「うちに来い」という言葉通りにしただけだ。この場合悪いのは俺か？否、綴じゃねえか！

「いくらなんでも近過ぎでしょ……」

「いいじゃねえか。『思い立ったが吉日』、『善は急げ』って名言があるのを知らねえのか？いい言葉だぜ、アレは」

「別に知ってるけど……垣根こそ『急がば回れ』という名言がある事を知らないのか？」

「まあ、そうだな。だが、本当なら朝来ても良かった所をあんたや学校側の事情やらなんやらを配慮した結果、放課後のこの時間まで待って俺はここに来たんだぜ？なら十分急がば回ってもいるはずだ」

「配慮した結果がこれなのか……まだ見知って一日程しか経ってないけど……大分、垣根がどんな奴か分かってきたよ、私は」

「嬉しいお言葉、ありがとうよ」

「思ってもない事を言うな……全く」

ぶつぶつと呟きながら綴は諦めたかのようにフツと溜息を吐くと再び言葉を紡ぎ始める。

「まあ……近いうちとしか言ってなかったのは私だ。仕方ない、と思う事にするよ。納得はいかないけど……昨日別れた後、垣根の事は学校側には伝えてあるし、特例の編入試験も許可が出るから問題は

ないよ。」

「そりゃ助かる」

「全科の試験は用意はしてある。分かっているとは思うけど、受験可能な科は一つだけだぞ？」

「分かっくんよ、んな事。しかし、アレだな。全科の試験用意とは随分と気前が良いじゃねえか」

「まあ、特に試験内容も考える必要はなかったのが大きいね。垣根が受ける試験は今年の入試内容と同様のものだからね」

綴は気のない声で言う。

今更だが、やる気ねえのなこいつ。

しかし・・・

「入試、ねえ」

入試ってのは学校にもよるが、2月〜3月に行われるのが、一般的な訳だ。中には例外もあるんだろうが・・・

そして、今は4月って訳なんだが・・・どうも慣れねえな。

まだ、俺の感覚ではまだ学園都市にいた時のまま・・・10月のままだからな。

綴と出会ったり武偵の話をしたりで一旦は脇に置いていたこの違和感、俺とこの世界との時間の齟齬・・・それを含めた元凶や手掛かりを俺としては出来る限り早く掴みたいものだが、武偵になったとしても直ぐにはそれらが見つかると思う程俺もこの件に関しては樂觀視しちやいねえ。何せ分からねえ事が多すぎるからな。

最もその分からねえ事を知る為に武偵になろうとしてんだがな。

なんにせよ、恐らくこの世界には暫く世話になるんだ。不服だがこの不快な違和感には慣れるしかねえ。

そんな事を考えていると、綴は口にくわえていた煙草に似た非合法的な何か（もう煙草じゃねえ口に出せねえ非合法なもの俺は判断した。本人に聞く気はねえ）を灰皿に置くと、さつきまでのやる気のねえ面はどこにやったのか、綴には似合いもしねえ真剣な面構えをした上で口を開いた。

「垣根、あんたには幸いな事に多くの選択肢が提示されている。その選択肢の中からどの学部、どの学科を選ぶかであんたの人生は大きく変わる事は分かっているな？」

「ああ」

「なら、問うぞ垣根。あんたはどの学部、どの学科を志望する？」

「俺が志望するのは

【強襲科】だ」

武偵高の資料を目に通した俺が選んだ学科、それが強襲科だ。

強襲科―平たく言えば、名の通り強襲逮捕を習得する学科。危険度全学科の中で断トツらしい。犯罪組織のアジトへの突撃も依頼さえあれば行うとの事だ。

そんな強襲科を俺は志望した訳だ。

「なんとなくだけど、あんたは強襲科を志望しそうな気はしてた」

綴は表情を変える事なく淡々とした様子で言う。

まあ、別に驚く様な事は言った覚えもねえし、過剰な反応されるのもウゼエだけだ。

だが、こいつに『なんとなくそう思ってた』って言われんのはなんかムカつくな……

「少し悩みはしたが、強襲科に決めた」

「即決じゃなかったのか？」

「ああ」

実際、俺も資料を見て即座に強襲科と決めた訳じゃねえ。少しばかり……具体的には2分〜3分程熟考した結果、一番俺に適した学科だと判断したまでだ。

「ふうん……まあ、いいけど。一応聞いておくけど……ちなみに何と悩み、何故強襲科に決めた？強襲科は【明日無き学科】とも言われているぞ？」

「貰った資料に目を通して目についたのは【強襲科】【探偵科】インケスタ」
【超能力者捜査研究科】だったな」

捜査という意味では探偵科にも惹かれたが、よくよく資料を読んで見ると探偵科に来る依頼は・・・アレだった。行方不明者の捜索や未解決事件のプロファイリング等もくるらしいが、大抵は迷子探しの浮気調査だの・・・挙げ句の果てには猫探しのなんつーか、他の連中がどう思おうかは分からねえが、俺的にはシケたもんばかりだったな。一応猫探しをしている俺を想像してみたが、驚く程似合わねえ！シニール過ぎんだろ・・・俺はくそつたれの悪党、垣根帝督だぞ!?!つてな理由で却下。

いや、マジでねーよ

超能力者捜査研究科、通称SSRにも惹かれるものはあった。超能力つてのが学園都市から来た・・・いや、学園都市にいたというべきか？ともかく文字通り超能力を持つている俺に適したもんだと思つた訳だが・・・よくよく考えてみたら学園都市じゃねえし、超能力を今更研究するつもりもねえ。

それに学園都市以上のものを期待出来るかも正直怪しい。また、資料には霊地での合宿を行うとも書いてあつたのを見て一気に熱が冷めた。科学の街学園都市出身の俺が霊地、いわばオカルト的な場所で合宿？なんだそれ・・・つーかSSRの連中には悪いが正直胡散臭せえ・・・SSRが一般的に行う事はサイコメトリーだのダウンジングだのといった超能力者捜査が主だったものらしい。俺の超能力・・・【未元物質】も一応そういった類の事は出来るっちゃ出来るが・・・最も適した活用方法だとは言えねえ。それ等の要因を踏まえて却下。

その点、強襲科は魅力的であり俺に最も適した学科だと言える。強襲科に来る依頼は学科の名の通り強襲逮捕だ。犯罪組織への突撃だのなんだのと色々あるらしい。捜査よりも壊す事に適した俺の未元物質を最大限に活かせる学科と言えんだろ。最も不殺つてのは気に食わねえが・・・依頼で金を貰って合法的に犯罪者でバカ共ストレス発散も

出来ると考えりや文句はねえ。三下をどうこうするつもりはあまりねえが・・・強襲科に依頼が来る位の奴なら少しは骨のある奴もいるだろうよ

なんにせよ・・・ここが学園都市であろうとなかろうと、俺は壊す事が本職だ・・・この道は変えるつもりはねえし、変えられねえ・・・

そんな理由で俺は強襲科に決めた訳だが・・・

「・・・アレだな、アレがこうしてああなつて強襲科に決めた」

綴が俺に時折向ける訝しむような視線、思惑を探るような視線を受けた事や正直に理由を言うのはマズイと思った俺はこんなアホみたいな事を言っていた。

なんだよ、アレがこうしてああなつたって・・・

「・・・垣根、何一つ情報が伝わって来ないぞ？」

「色々考えた結果そんな中で一番俺に適したのが、強襲科だと思っただ・・・そんだけだ」

「ふくん。でもいいの？さつきも言ったけど、明日無き学科だぞ？」

「明日無き学科、ねえ」

明日無き学科に関しては資料の強襲科の情報欄にも注意事項として載ってはいた。

なんでも、卒業時の生存率がおよそ97.1%・・・つまりはおよそ3%の生徒が死亡するらしく、強襲科を志望する学生やその家族には自己責任やらなんやらの所謂【念書】を書かせるらしい。つまりは、死ぬかもしれないから気をつけるよって事だ。

それですいた俗称が、明日無き学科って訳だ。だが、そんなもん気にはならねえ。

暗部時代・・・学園都市にいた頃も生と死との隣り合わせの日常を送ってた訳だ。最も死ぬ気は一切しなかったがな、あん時以外は・・・

むしろ、3%しか死亡しないと考えてみれば生存率は高い方だ。

「明日無き学科に関しちゃ問題ねえ。俺に死ぬ予定はねえし、誰も俺を殺せねえよ」

俺は学園都市だろうが学園島だろうが・・・どこにいようが死ぬねえ・・・少なくとも一方通行の野郎を殺すまではな！

「そこまで自信過剰だと逆に清々しいもんだね」

綴は苦笑しながらそう言うと、どこかに電話をかけ始めた。

詳しい事は綴が電話中なので分からねえが、恐らく一連の話の流れからして強襲科の関係者だろう。試験について話てるのかも・・・にしてもアレだな、時折電話先から『殺す！』だの『ぶつ殺す！』だの物騒な声が聞こえるのは気のせいか？気のせいじゃねえな。世紀末過ぎんだろ武偵高・・・そして強襲科・・・
つつーか誰だか知らんが、うっせえよ！

正確な時間は分からねえが、5分位電話を終えた綴はフツと溜息を吐くと俺を見て口を開く。

「30分後、強襲科特別編入試験を行う」

こうして俺の武偵への第一歩が始まろうとしていた。

続く

第六弾 新たな武偵 後編 I

【強襲学部―強襲科特別編入試験】

《概要》

- 1―例外的に編入試験を設ける。
- 2―強襲科特別編入試験の内容は以下の項目とする。
- 3―第一試験―狙撃科スナイプの射撃場において射撃の適性試験。10分間の中距離射撃を行った上で獲得スコアから強襲科に必要な射撃の適性を判断する。

4―第二試験―実践形式の試験。郊外にある2階建の廃墟に犯罪グループが潜伏中と仮定。犯罪者は10名。武装した上で廃墟に突入し10名を無力化及び捕縛せよ。なお、本試験における犯罪者役は本校の強襲学部の強襲科及び狙撃科に属する新入生8名、2年生2名が務める。あらゆる事態を想定した上で挑む事。戦闘力及び状況判断力等武偵、ひいては強襲科に必要な素質が試される。

※武装品は以下の通り。

- 【拳銃：2丁】 【バタフライナイフ：1本】 【防弾制服】 【弾薬：24発】
- 【スタングレネード：1個】

以上が綴があの話の後、俺に手渡してきた試験内容の詳細だ。

要は試されるのは強襲科に必要な要素があるかどうかで事だけだ。

分かりやすく結構なこった。

あれから20分近くが経ち、俺は今第一試験の会場である狙撃科射撃場とやらの足を向けている。

学園都市では裏側の住人である俺は暗部での活動の際も頻繁って

程じゃねえが、何度か銃火器を使った事はある。

大した労力じゃねえが、学園都市の超能力者や大能力者問わず能力者ってのはその能力の使用の際には脳内での演算が必要となる。能力を使用しなくても殺せる、あるいは無力化出来る奴はそうするにこした事はねえ・・・ってな理由だ。能力者の演算を妨害するキャパシティダウンって存在がある事も一つの要因だ。

あまり影響は受けはしねえがな・・・

だが、武偵ってのは銃火器を取り扱う頻度は高い。

恐らく暗部時代の俺よりも高いだろう。

強襲科・・・そして射撃^そ・狙撃^道のプロを育成する狙撃科の連中の存在。

射撃適性試験は例年入試で取り扱われると綴は言っていた。

この世界には一般の中学校の他に武偵中学校があるとも聞く。

余談だが、一般中学は「パンチュー」って略すらしい。なんか卑猥な感じがするな・・・

一般中^{パンチュー}が卑猥なのはともかく、だ。この俺がド素人のガキ、あるいは素人に毛が生えた程度のガキに劣るとは思っちゃいねえ、いねえが・・・

綴曰く武偵高の2年に狙撃科所属のSランクの奴がいるらしい。

そいつは、入試は勿論Sランクで合格。

狙撃科の入試も俺が受ける射撃適性試験とは内容は違うが、試験は全てパーフェクトだったそう。

Sランク武偵は数える程しかいないそうだが、前述した狙撃科の奴同様にぶっ飛んだ奴らしいな・・・

武偵を舐めてた訳じゃねえが・・・そんな奴がいるって事だけは覚えておく必要があるそう。

なんて事を考えながら歩いていると、狙撃科の射撃場とやらが見えてきた。

~~~~~射撃場~~~~~

「お前が垣根帝督っちゅー奴やな」

射撃場に入るや否や20代前半かそこらのポニーテールの大女が声を掛けてくる。

顔立ちから察するに中国系の奴だろうか？

「いかにも、俺が垣根帝督っちゅー奴だが？」

「おまつ……ムカつく奴やな……まあええ。ウチは蘭豹<sup>らんびょう</sup>、試験を見るよう言われとる」

「そうか」

「綴センセから聞いたけど、『死ぬ予定はないし、誰も俺を殺せねえ』って大事宣ったらしいな？」

「言ったような気がするが……」

別段意識して言った覚えはないので、そんな返答になってしまう。

「そんな大事宣うっちゅー事は、それなりの自信があるんかあるいは口先だけのアホか……あんたがどっちか見極めたる！」

それなりの自信か口先だけのアホ、ねえ……

『健闘を祈る』なんて又カした綴にしても目の前のこいつにしても……

俺が誰だと思つてやがるんだ？

いや、仕方ねえか……

綴や蘭豹の認識にある垣根帝督って人間は、学園都市で第二位に君臨した垣根帝督じゃねえんだ……仕方ねえと言えれば仕方ねえ。

だが、そう思われるのは癪だ。

だから……てめえ等に見せてやるよ、垣根帝督って人間をよ！

「出来ねえ法螺は吹かねえぞ、俺は」

その後、蘭豹は射撃レーンまで俺を連れていき銃を手渡してきた。

「試験始めるけど、一つ確認。銃火器の扱いは？」

「・・・嗜む程度にはあるな」

「あるんやったらええ。ほな始めるで！」

こうして、第一の適性試験が始まった。

試験はつつがなく進んでいく。

垣根は正確な射撃でポイントを積み重ねていく。

蘭豹は思う。

垣根帝督という少年は妙な奴だ、と。  
構え方も使い慣れた人間のソレだ。

個人的には残念ではあるが、今年の新入生の中には9mm弾の反動で手ブレを起こす奴もいる。

だが、垣根は手ブレを起こす様子もない。

的に対して外す事なく撃ち抜いている。狙い所が難しい高得点ばかりとは流石にいかないが……

確かに上出来だ。

現時点でのスコアだけ見れば今年の新入生とは比べものにならない程だ。だが、あくまでそれだけだ。

この程度で『誰も俺を殺せねえ』等豪語出来るだろうか？否、出来ない。していい筈がない。

武偵は……ひいては強襲科は常に死と隣合わせだ。

強襲科は明日無き科という二つ名の通り毎年死者が数名は出る武偵の中でも死亡率は高い。

この程度で、そんな危険な世界を歩もうとしているのに、誰も自分を殺せないなんて大それた事は普通は言えない。言わない。言わない。いや、だがそれにしても……

だが、垣根はそれを平然と宣ったという。

こいつは口先だけのバカなのか？

いや、だがそれにしても……

『出来ねえ法螺は吹かねえぞ』

そう言った時の奴の目には絶対的な自信が見えた。

つまりは、奴には絶対的な自信を持たせる何かがある、という事だ。綴センセの話では、昨日目が覚め武偵の存在を知ったのも昨日らしい。

その少年が、翌日である今日に武偵になるための試験を受けに来ている。

中々興味深い。

面白い奴だ……タメ口を使って来る辺りはムカつくが……

見定めてみよう、垣根帝督という男を……

蘭豹はそう思った。

10分が経ち、射撃適性試験は終わった。



射撃適性試験の結果  
受験生 垣根帝督

スコア 620/700

ランク A

ランクA。

まあ、こんなもんだろ・・・

撃つ機会が増えればもう少しスコアは伸びるんだろうが・・・伸びても俺の見立てじゃ650が限度って所だろ。

パーフェクトスコアを出した狙撃科のSランクの奴は色々つぶっ飛んでんな、オイ

「まあ、射撃適性はまずまず言うところやな。ほな、次は強襲科入試の醍醐味・・・実践形式の試験や！」

蘭豹の奴はそう言うのと、ついて来いと言わんばかりに俺の腕を掴み外へと促す。

試験会場とやらに向かうのは良い。ただし、腕は掴むな・・・あと力入れすぎな、痛えよ。マジで痛え・・・

射撃場で10分間も撃ちつづけていたせいとか、やや硝煙臭くなった身体で試験会場である廃墟に向かっている最中、蘭豹から聞いた話。

昨年の強襲科志望者を対象とした入試をSランクで合格した奴が出たらしい。なんでもそいつは今探偵科に転科したらしく、Eランクらしい。【遠山】って奴だそうだが・・・遠山ってどこかで聞いた事あるな・・・どこで聞いた？色々あって忘れてんのか？

流石にSランクになった時の試験内容までは蘭豹も言いはしなかったが、おかしな話だ。SからEなんぞ、都落ちもいいところだ。まぐれでSランクになれるとも思えねえ・・・まあ、この件は少し気

になるが・・・武偵高に入った後、遠山って奴に直接聞きや済む話だしな。

そんな事を考えつつ蘭豹から情報収集しつつ歩いていると、試験会場であるという廃墟にたどり着いた。

「ほな、垣根。もうすぐ第二の試験始めるで！」

「うい」

「第二の試験は試験概要記載の通りや。既に犯罪者役の生徒は待機済み。垣根が突入した時点で試験はスタートや」

余談だが、綴は今年の入試と変わらないみたいだな事言っていたが来る最中蘭豹に確認してみるとそうでもなかった。この廃墟を使用した点は同じだが、内容は少し違った。今年の入試では強襲科志望者10名が互いに捕縛しあうつてもものだったらしい。

綴・・・あいつアテになんのか？

蘭豹は強襲科の実技試験から良い感じのものをチョイスしたとか言ったが・・・まあ、気にしても仕方ねえが・・・本当大丈夫か？武偵高

蘭豹はそう言うと、記載されていた武装品を手渡してくる。

一応、素直に受け取り装着してみる。

「試験や思っつて舐めるなよ？犯罪者役の生徒は新生がほとんどいえど、Aランク7名。Bランク3名や。特例やから難易度上げといたで！あと、お前にムカついたからな」

「ムカつくも何も初対面だろ・・・」

「っつーか、試験概要の紙貰った時は対面すらしてねえぞ？会ってもねえ奴にムカつくのか？」

『死ぬ予定はねえし、誰も俺を殺せねえよ』の件があつてイラツてきてな・・・出来心でやったんやけど、反省はせえへん」

キリツとした顔で俺が言ったという台詞を吐く蘭豹。

だが、蘭豹・・・俺はそんなお前にイラツてきてる訳だが？

「反省はしろよ・・・せめて『反省してまーす』とでもいいから言えよ」  
どうでもいいが、この防弾制服・・・似合わねえな、俺に。

なんつーか、キヤラにあつてねえつていうかアレだな

「ほな、もうすぐ始めるけど・・・準備はええか？」

準備は十分出来ている。

出来ているが・・・

「一つ確認したい事がある」

「なんや？」

俺が確認したい事、それは・・・

「この試験では、”何をしてもいい”んだな？」

「何を”がどこまでを指しているんかは分からんけど、不殺を守ればええ。己の出せる力全てが試される試験やからな」

「オーケー、それが聞ければ十分だ」

「ん？」

蘭豹はそう呟いた俺を見て何やらキョトンと首を傾げているが・・・

正直似合わねえから止めとけ。切実にだ。

『己の出せる力全てが試される』

それが聞ければ十分だ。

間もなくして、俺は試験会場・・・廃墟に突入。

こうして、運命の第二試験が幕を開ける。

綴、蘭豹・・・お前等に見せてやるよ、俺を・・・本当の垣根帝督  
をな！

続く

## 第七弾 新たな武偵 後編 I I

＼垣根 side ！

廃墟内に入り暫くすると、標的はすぐにこちらにやって来た。

こちらに向かって来る二名の生徒・・・つまりは犯罪者役だが、二人との距離はまだ少しある。

一人はバタフライナイフを振りかざしながら、もう一人には何かを手をしている様子はない。

・・・アレか？考えなしで突っ込んで来てんのか？

それとも俺を舐めてんのか？

「まあ、どちらにせよ現実的とは言えねえな・・・」

無策に突っ込んで来る二人の頭の出来具合を心配しながら、スタングレネードを投げつける。

スタングレネードが炸裂し、行動不能に陥っている二人に急接近しボディーに強烈な一撃を食らわせる。

強烈な一撃を食らった二人の生徒に激痛が走りそのまま意識を失った。

二人の生徒を無力化した垣根に一発の銃弾が放たれる。

垣根は簡単だと言わんばかりに交わすと、銃弾が放たれたであろう場所に向かって走り出す。

銃弾を放った狙撃科の生徒は垣根に向かって何度も銃弾を放つが当たる気配はなく、徐々にだが生徒の顔に焦りの色が見えはじめる。

そうこうする内に垣根は接近し・・・両者は対峙する。

「見つけた」

こちらを馬鹿にするような、挑発するような垣根の物言いに思わず怒りで我を忘れ不得手とする接近戦に持ち込む生徒だが、不得手な接近戦技は通用する筈もない。

「オイオイ・・・怒りで我を忘れたか？短絡的だな」

垣根はそう言うのと生徒が全力で放った拳をあっさり交わし、放った拳が交わされ身体が前のめりになっている生徒に足払いをかける。足払いをかけられた生徒は前方に倒れ込むのだが、倒れ込んだ次の瞬間には垣根によって顔を地に押し付けられる形で後頭部を踏み付けられ意識を手放した。

「さて、ここからどうしたもんか・・・」

自身の足元に転がる狙撃を行った生徒の脇腹を足で突きながら呟く。

この三下共は都合良くやられに来てくれたが、残りの連中がこいつらみてえな馬鹿ばかりとは限らねえ訳だ。

つつーか、強襲科志望の俺としては切実にそう願いたい。

強襲つてのは、一発で決めなきや意味がねえ。

この三下共はそれを分かってなかったのか、あるいは分かっちゃいたがテメエの力量と相手の力量を見極められなかったのか・・・どちらにせよ無能の一言に尽きる。

さて、もう一度言うがどうしたもんか・・・

残りの連中を一人一人探し回るのもありつつやありな訳だが、わざわざ時間をかけて探すのも面倒臭え。

【武偵は疾くあれ。先手必勝を旨とすべし】

武偵憲章5条にそんなのがある。

そして、これは強襲科の試験であり強襲に必要な要素が試されるもんだ。

強襲・・・強襲つてのは攻撃の予告を与える事なく”不意”に襲撃する事だ。

”不意の襲撃”

そして、蘭豹の奴は不殺以外なら”何をしてもいい”  
と言った。

”何をしてもいい”  
ならここは・・・

「いいいぜ、三下共・・・本物の強襲って奴を見せてやるよ」  
言うと同時に能力を発動させる。

周囲の空気が一変する。  
舞台は整った。

これから始まるのはまともな武偵が行う強襲とは大きく掛け離れたもの。

垣根帝督による強襲である。

そして、余談だが今から垣根が行う強襲は後に伝説として語り継がれる事となるのだが・・・当然、この時の垣根には知るよしもない。

く蘭豹 side

さて、第二試験が始まって2く3分が経った。

中にいる忍び込ませている諜報科から情報を収集していると、こちらに一つの足音が近づいてきよった。

足音がする方に目を向けると、平素と変わりなくやる気の無い様子の綴センセがそこにはおった。

「おく、第二試験始まってるのはか」

「始まったばっかやで」

「そーか。で、中の様子は？」

「中に忍び込んでいる諜報科の服部センセからの報告やと垣根は三人を無力化したらしい。容赦ないやり方らしいけどな」

諜報科の教師、服部瞬蔵センセ。

名前はなんか古臭いが21歳とウチと年齢はあんま変わらん男。基本ええセンセやけどちよつと癖があるというか、アレやウザい。尋

常じゃなくウザい。主に喋り方がウザい奴や。

そのウザい服部センセから聞いた容赦ないやり方はともかく、この短時間で三人を無力化する辺りは大した奴やとは思う。銃火器の扱いといい報告といい戦闘スキルは高そうやな、垣根は。

「そーか・・・大した奴なんだなあ垣根は」

綴センセの台詞は感嘆したような物だが、相変わらず表情といい声色といいやる気の欠片も感じへんな。

ウチが綴センセのやる気の無さに呆れていると・・・

廃墟内からありえない音が鳴り響いた。

銃声でも発光音でもない・・・垣根や犯人役の生徒に持たせた武装品からはおおよそ発生しないであろう、

爆発音が鳴り響き・・・そして、廃墟内からは何かが崩れる音が聞こえる。

これらが意味する事・・・それは廃墟が破壊されている、ということだ。

「おお・・・なんだ？」

異常な事態やのに驚いている様な台詞を平素と変わらずやる気の無い表情&声色で言う綴センセにイラツときつつも今は状況を掴む為に中にいる服部センセにインカムを使い連絡を取る。

『服部センセ!!何があったんや!?!』

問うと、返ってきたのは爽やかな声。だが、ウザい!

『おお!!その声は蘭豹先生じゃないですか!んく・・・いやあ、相変わらず素敵なお声だ!んく』

『くだらん事言うなアホンダラ!!何があったんか聞いとるんや!!』



綴センセにしても服部センセにしても緊張感がないんかいな！

『んく、くだらん事つてツレないですねえ……んく、受験生君がやりましたよ？んく』

服部センセは淡々と言っているが……廃墟の破壊はともかくとして爆発を起こせる武装品なんか誰にも持たせてない！！

『センセ……垣根が何をしたんか教えてくれんか？』

爆発音及び廃墟の破壊……一つの推測がある。

だが、確証を得る為に確認しておく。

恐らく、恐らくやけど垣根は……

『んく、この服部瞬蔵……感嘆いたしましたよ！んく、いやねえ……彼が二、三何かを呟いたと思つたら……んくドカーンですよ？ドカーン！そして彼は彼で正体不明の爆発と同時に消えちゃいましたし！んく、もう今週一番のびつくりドツキリですよ！！』

……んく、が多過ぎるんと頭の悪そうな説明でイマイチ情報が伝わりにくい。

せやけど、その伝わりにくい情報の中からでも分かった事はある。

やはり垣根は……

「<sup>ステルス</sup>超能力使いつて所か」

一連の話を聞いていたのか、

綴センセはやる気の無い顔をややキリツとさせそう言った。

超能力……使用出来る人数は少ないが武偵や犯罪者の中にも使用者がいる。超能力を使う武偵を【超偵】と呼ぶ。ウチの学校にも優秀な超偵がいるが……垣根もその類とはなあ。なるほど、絶対的な自信の裏にはそんなもんがあつたんか……中々面白いやないか！

『服部センセ、垣根はなんて呟いたんや？』

『んく、それがですねえ……【逆算】だとか【本物の強襲】がどうと

か呟いてましたよ？んゝ訳が分かりません！服部、気になります!!」  
相変わらずのテンションの服部センセにイラツときつつ、爆発音が  
鳴り響き続ける廃墟に目を向ける。

『逆算』はともかく、『本物の強襲』・・・か

本物・・・はっ、こら面白いやないか！

あんたの強襲・・・しかと見届けたる！

く廃墟内く

廃墟内は阿鼻叫喚と化していた。

内部に妙な違和感、悪寒が走ったと同時に壁が・・・床が・・・天井が破壊されていく異常事態に加え、砂埃の先に突如として現れる凶悪な笑みを浮かべる茶髪の男。

ある生徒は異常な事態に極度の混乱に陥り意識を失い、ある生徒は崩壊した壁の先から突如として現れた

茶髪の少年、垣根の放つ異質な雰囲気と腰をぬかし戦意を失った所、意識を刈り取られ無力化。またある生徒は果敢に垣根に挑むが異常事態に冷静さを欠き容易く敗れる・・・

そうこうする内に残りの生徒は一人になっていた。

そして、その生徒は今垣根と対峙している。

「な、なんなんだお前は!?!それにこんな崩壊聞いてないぞ!?!」

生徒は垣根が放つ異質な雰囲気と崩壊が続く廃墟の様子に戸惑いながらも、垣根になんとか銃口を向ける。

「なんなんだとは失礼な奴だな。聞いてないだ？当たり前だろ。これは強襲だぜ？クソボケ」

垣根は溜息をフツと一息吐くと拳銃を取り出した。

拳銃を取り出した垣根を見て対峙した生徒に緊張が走る。

「動揺は隠せてないが、そんな中でも銃口を俺に向けられる辺りテメエは三下の中でもまあマシだな」

垣根はつまらなさそうにそう言うと、ゆつくりとだが生徒に近づいていく。

近づいて来る垣根を見て生徒は銃弾を放つが、恐怖という感情から手は振るえ狙いは定まらない。そして垣根を正確に捉える事は出来ず、無情にもあらぬ方向に銃弾は向かう。

入っていた弾薬を切らし焦りはますます酷くなる。

大丈夫だ・・・まだ奴との距離は少しある。

落ち着け!!落ち着け!!落ち着け!!

恐怖や戸惑いから手が振るえてしまい中々銃弾は上手く補充出来ず時間は思った以上に掛かってしまう。

チラリと垣根の様子を見た際には・・・既に垣根は生徒の目の前から消えていた。

「目の前の敵から目反らすなよ。ド素人か? テメエは」

突如背後からする垣根の声。

いつの間にか・・・垣根から意識を離れた数瞬の間に垣根は生徒の背後を取っていた。

その事実には生徒は驚嘆したと同時に後頭部をグリップで殴られ気絶した。

残り生徒数0名

く垣根 side く

『んくんく』つてうっせえ監視野郎がいる前で能力使用は気が引けどが、結果としては正解だったな。

能力で三下共の大体の位置を把握した後は・・・未元物質による建物内の崩壊を狙う。

パニックを起こした奴程仕留めやすいもんはねえ。

移動時には壁を破壊、上層に行く時には天井を破壊し時短で標的の元に向かう。

後は・・・冷静さを失った馬鹿を刈り取るだけ。

廃墟の破壊を狙い未元物質を使用したか・・・まあ、三下相手に直接使った訳じゃねえし、良心的だろ。

どちらにせよ・・・これで蘭豹も文句はねえ筈だ。  
十名を無力化したんだ試験はクリアだ。

クリアなんだろうが・・・気掛かりな事が一つある。

『ん〜』の野郎とは違う存在がこの廃墟内にいる。

廃墟内に入った直後から感じる奇妙な視線・・・

敵意でも殺意でも無ければ、好意でもない。

ただ単にこちらを見ているだけ、といった視線。

そして、その視線は今も俺に向けられている。

武偵か？

だが、この奇妙な視線は人間染みたまものじゃない・・・

だったら、一体なんなんだ？

正体不明の視線についてアレコレ考えるが、答えは出ない。

「最近、分かんねえ事ばっか増えてんな」

首の関節をコキコキ鳴らしながら呟く。

ともあれ試験自体は終わった。

正体不明の視線に違和感や疑問を感じつつも外にいる蘭豹の元に

行くため、元来た道に引き返す。

増えていく謎に思わず溜息が漏れてしまう。

そんな時だった。

一つの銃声が廃墟内に鳴り響いたのだ。

放たれた銃弾は謎の光を帯ながら、垣根の頬を掠る。

そして、垣根の頬から滴り落ちる一筋の鮮血。

間もなくして、一つの声が聞こえてくる。

「油断大敵って言葉を知らないのか？受験生。武偵になるのであれば

一つの油断が命取りになるぞ？」

少し低めのこちらを威圧するような声は垣根にドンドン近づいて

くる。

間もなくして、スーツにサングラスを着用した20代前後の男性が  
姿を現した。

続く

## 第八弾 新たな武偵 後編 I I I

目が覚めた時から垣根を襲っている不可解な現象や今回の試験中に感じた正体不明の視線。

増えていく謎に思考が傾き周囲への意識が散漫し、反応が遅れた為だろうか？

あるいは、垣根に放たれた銃弾が生徒の放ったソレとは明らかに違う弾速だったからだろうか？

はたまた、能力使用を行っていないなかった為だろうか・・・

いずれにせよ、垣根の頬には一筋の血が滴り落ちておりこの試験に始めて傷を負った・・・それが事実である。

「油断大敵という言葉を知らないのか？受験生。武偵になるのであれば一つの油断が命取りになるぞ」

スーツを着用しサングラスを掛けた男性が垣根に近づきながら言う。

確かに油断はあったのかもしれない。

垣根はこの試験の中で、ある種のラインを引いてしまっていたのだ。

垣根は学園都市では裏の世界で活動していた。

そんな裏の世界では、血で血を洗う抗争が当たり前であった。学園都市に不利益を与える者や害を為す者の始末、あるいは命知らずなスキルアウトの奇襲なんて事が垣根が過ごしていた裏の世界で日常だった。

学園都市に七人しかいないⅠⅤⅤの超能力者である垣根にとって敵対する存在のほとんど、いやほぼ全ての存在が自らより数段劣る文字通りの格下ばかりだ。

工夫次第、あるいは奇をてらった攻撃でどうこう出来る領域を超えた存在、それが学園都市における垣根だ。

だが、いくら格下とはいえ垣根と同様学園都市の脳開発によって人工的に異能の力を得た者、天然の原石と言われる能力の持ち主……あるいは戦闘ひいては殺しの手段を幾つも持つ裏の世界の住人が垣根と敵対するほとんどだ。

彼等は圧倒的な力を持つ垣根にとっては些細な存在ではあるが、裏の世界を知る存在である。

そんな彼等の力は過少評価する訳はなく、常に防御の意味を兼ねて能力は微弱ながら能力は発動しており、「アイテム」との抗争時にアイテムの構成員、「絹旗最愛」の能力による攻撃もその能力により無効化した。

そんな能力保護を行っていた垣根は学園都市では、傷を負うなんて事はそうそうなかったのだ。

だが今回の試験においては面白みのない試験である事や犯人役の生徒達の力量を見て学園都市とは違い、この試験では能力発動による保護は必要ないと判断してしまったのかもしれない。

らしくはないが、垣根には確かに油断が生じていた。

例えば能力発動をせずとも得体の知れない視線に思考を偏らせる事なく、意識を周囲に向けていれば結果は違ったかもしれないが……結局は後の祭だ。

垣根は頬を滴り落ちる血を手で拭くと、不思議な事に傷口はまるで初めからなかったかのように塞がり血は止まった。

それを確認すると自身に銃弾を放った男性を見据える。

そして、警戒を取り戻し改めて思う事は一つである。

違う……コイツじゃねえ、と。

あの得体の知れない視線はこの男性から感じたソレとは明らかに違う。

確かに未だ尻尾すら出さない得体の知れない視線は気にはなる。

だが、どんな理由があれ結果として油断していた自身に傷を付けた目の前の男性に垣根は今、集中する事にした。

「で、テメエは？」

垣根は男性を見据え、問い掛ける。

「テメエとは、口の聞き方がなっていないね。だが、聞かれたのだから答えてあげようか」

男性はフツと溜息を吐くと口元に笑みを浮かべ、言葉が続ける。

「私は蘭豹先生と同じく強襲科の教諭を務めている羽賀、羽賀雷人<sup>はがらいと</sup>だ。君も東京武偵高に入りたいと思うのであれば覚えておきたまえ」

垣根も男性同様溜息を吐く。

テメエの名前が聞きたかった訳じゃない、と。

「・・・さっきの問いはその羽賀、テメエが何をしたか、何をしに出てきたのかって意味で聞いたんだがな」

「ふむ・・・それは失敬。試験としてはだね、10人と伝えられていた犯罪者は実は11人、つまりは1人が隠れ潜んでいたという設定だ。『あらゆる事態を想定せよ』というのはこの事なんだ。そして、隠れ潜んでいた最後の犯人である私を捕縛出来ればパーフェクト、といった所だ」

「なるほどな・・・テメエの事は『んゝ』の野郎とは違う存在として感知はしていたが、そういう意味合いがあったとはな」

能力発動時に廃墟内に存在する人間の位置を把握した際に感知した。

試験前に10人と伝えられていたが、能力で感知出来た人間の数12人であり可笑しいとは思ってはいた。

最も、この件についての最大の謎は正体不明の視線を送っていた奴の肉体的存在が感知出来なかった事なんだが、今は捨て置く。



ともかくにもだ、自ら監視役だと言わんばかりの『んゝ』の野郎と同じ監視の類と思つて放置していたが・・・まさかソイツが犯人役であり、俺に傷を負わせるなんて事になるとはな。

「にしちや、テメエの言い分はおかしかねえか？」

本来なら俺が見つけるべき存在だろうが、テメエは。何故自ら出てきた？自首か？」

「・・・教官に対するその言葉遣い、全く腹立たしい限りだ」

羽賀は苦々しげな表情で垣根を睨むと言葉を続ける。

「なに、ただ君が気に食わなかつただけ・・・とでも言っておこうか」

気に食わなかつただけ・・・感情的かつ私的な理由じゃねえか・・・くだらねえな

「で、テメエは何がお気に召さなかつたってんだ？」

特に意味はなかつたが、潰す前に一応聞いておく。

「全て、とでも言っておこうか。傲岸不遜なその態度。懸命な努力を続ける生徒達を馬鹿にしたような言動。そして、己の力に過信しきつたその様・・・全てだ」

傲岸不遜、ねえ・・・

見下すも何もテメエ自身と他人を正当に評価した結果、そうなつただけなんだがな・・・

所詮三下は三下に過ぎねえんだよ。

己の力を過信？

誰に向かつて言つてんだ、コイツは？

「で、テメエはそんな理由でいたいけな受験生に発砲したってのか？  
短絡的だな、オイ」

「なに、私もただ感情的に発砲した訳ではないさ。教育的指導という  
面もあるさ」

羽賀はサングラスを指で掛け直しながら言う。

「己の力を過信した武偵は危険だ。己の力を信じ過ぎるあまり敵との  
実力差を測かり損ねるからな」

羽賀とやらの言わんとしている事は分かる。

俺の元にわざわざ自殺しに来るスキルアウトやら半端な能力者が  
その典型例だな。

中途半端な力量に酔いしれて何の根拠もなく圧倒的に格の違う相  
手と同等、あるいはそれ以上だと思いつむ・・・そんな輩は少な  
かった。

だが、それは目の前のテメエにも言える事なんじゃねえか、羽賀？

「何が言いたいか、分かったかね？」

羽賀は垣根を見つめながら言う。

「いや、全然だな」

肩を竦めておどけるような仕種を見せる垣根に羽賀の眉が怒りか  
らなのか、ピクリと動く。

「試験中の君の言動、挙動、そして能力・・・全て見させてもらった。  
君は些か他人を見下す傾向があると判断した。原理は分からないが、  
君の爆発を起こすステルスは素晴らしいが・・・それだけだ。それだ  
けに過ぎない。そんな程度の力で混乱を起こし、それに乗じてつまら

なさそうな・・・自分が勝つのが当たり前といった表情で生徒達を倒した君に教えておこう。上には上がいる、と。君のような自分の力を過信しきったチンピラが真っ先に死ぬ・・・そんな世界だ、武偵というのは」

上には上がいる・・・コイツ本気で言ってるのか？

爆発を起こすステルス？

爆発しか起こしちやいねえから仕方ねえが・・・俺の未元物質はそんなチャチなもんじゃねえ・・・

その程度の力？

はっ、中々どうして愉快な事を宣いやがる

思い上がってるのはダメエだ、羽賀

「くっ・・・くっくっく・・・！はははは!!はははははッ!!」

堪えてはいたが、もう駄目だった。

笑いに笑いながら羽賀を見据える。

「何かおかしな事でもあったかね？」

羽賀の口ぶりは平静を装ってはいるが、自身を馬鹿にしたような垣根の笑いに怒りを隠せないのか顔はかなり真っ赤に染まっている。

「汚ねえ口からプープー屁出してんじゃねえよ、笑っちゃまったじゃねえか・・・くっ・・・くっくっくっくっくっ!」

言いながらも笑い続ける垣根は愉快そうだが、それに反比例するかのよう羽賀の顔は怒りで染まっていく。

「何がおかしい!!言ってみろ!」

「くっくっくっ・・・はあ・・・」

「いつまで笑っている!？」

なおも笑い続ける垣根に対し血管がぶちギレんまでに羽賀の怒りが頂点に達する。

「はあああ・・・あ？何がおかしいかまでわかんねえくるくるパーなのかよ、テメエは」

この一言が、羽賀の怒りを増幅させた。

「ふざけるな!!ただのチンプラ風情が!!私をコケにするな!!」

突然、バチバチという音が鳴り響く。

そして、羽賀の周囲に電流が帯び始めた。

ほう・・・中々面白えじゃねえか、ステルスってのも。学園都市でいう所の電撃使い系にあたるって訳か。そして、さっきの光を帯びた銃弾は超電磁砲レールガンの要領で加速させたって所か？

最も、本物の超電磁砲である御坂美琴には威力・速度ともに数段劣るが・・・まあ、精々1v3程度の実力だろう。

「驚いたかね？私は強襲科の教官であるが、ステルスも使えるのだよ!!私のステルスは電撃!!爆発という陳腐なステルスしか使えない君とは格が違うのだ!!」

格が違う、爆発ねえ・・・

本当に言うこと為すこと一々くだらねえ野郎だ。

この程度の力でコイツら俺に強さを誇示しようとしている・・・それが酷く哀れに思える。

そして、聞き捨てならねえ事を宣った。

「先程までの侮辱や非礼・・・詫びるなら今のうちだぞ?」

敵意の籠った眼差しで羽賀は垣根を見据える。

羽賀としてはいくら垣根が無礼な人間であろうと、謝罪すれば、不問にするつもりだった。

そもそも、羽賀の目的は傲岸不遜、爆発しか起こせないステルス使いの少年に上には上がいる事を伝え、自身の力に思い上がっている事を止める事だ。

羽賀はそれを含め、自身を馬鹿にした態度を取る少年に灸を据えられればよかった。

よかったのだが、垣根から返ってきた言葉は羽賀の思惑を大きく外れるものだった。

「ベラベラと臭っせえ息バラ巻いて楽しいか？」

その言葉に羽賀の怒りは臨界点に達した。

羽賀の周囲に帯びている電流が増幅する。

「・・・ッ!!身の程知らずのチンピラが!?!上には上がいる事を知り散りたまえ!!」

増幅した電流が垣根に向かって解き放たれる。

垣根に迫る閃光・・・そして、周囲は眩しい光に包まれた。

「ふむ・・・少しやり過ぎたか?」

羽賀は一人呟く。

歯にももの着せぬ垣根の物言いに思わず本気を出してしまった・・・

武偵法は守ってはいる為、命に関わる事態には陥ってないはずだ。

最もそれだけであり、直撃したのは確認したから無事ではないだろうが・・・まあ、舐めた態度を取っていた事や思い上がった態度への高い授業料と思えば問題なからう、と羽賀は思った。

「ふむ・・・」

垣根がいた辺りを黙視してみると、先程放った電流の影響により砂埃が酷く舞っており様子は確認出来ない。

暫しジツと見つめていたが、あそこで倒れている筈の垣根の回収や医療機関への搬送はアニメヲタクの服部先生がやってくれるだろうと思ひ、溜息を一息吐くと踵を返す。

「あまり武偵を舐めるよ、受験生」

そう言い残し、その場から立ち去ろうとした。

立ち去ろうとし数歩、歩を進めた所で背後から物音がした。

そして、背中に走る悪寒。

と同時に聞こえる筈のなかった声が耳に入ってくる。

「オイオイ・・・そんだけか？」

ありえない!?

羽賀はそう思い勢いよく振り返る。

振り返った先には傷はおろか、肌や髪、服に汚れ一つつけていない垣根が悠然と立っていた。

「なっ、なぜ・・・!？」

なぜ、としか言いようがなかった。

直撃して無事ではいられない程の電流を浴びたのに何故この男は平然としている!?

「何故か・・・単純明快だ。テメエ如きじゃ俺は倒せねえ、それだけだろ」

先程までの羽賀であったのなら、垣根の物言いに反論していただろう。

だが、出来なかった。

羽賀が全力で放った電撃を受けても平然としている垣根を見て抱くのは恐怖のみだった。

「武偵を舐めるな、か。ご忠告痛み入る。だが、だからこそ俺からもあなたに言いたい事があるんだが・・・聞いてくれるか？」

「な、な、な、何かね!？」

「テメエこそ・・・未元物質この俺を舐めるなよ」

先程までの平素と変わらぬ声色から冷酷な、冷たい声色に変わる。

「な、何を・・・」

羽賀はそれ以上言葉を紡ぐ事は出来なかった。

垣根の背中に現れた異物を目の当たりにしてしまったからだ。

垣根の背中に現れた異物・・・それは純白に輝く六枚の翼。

未元物質という異質な能力は、その能力を最大限に使う際に垣根の意思を問わず正体不明の純白の翼は出現する。しかし、簡単な能力の使用であるのならば出現させずとも可能である。例えば、この試験の中で正体不明の爆発を起こしたように・・・

では、何故出現させたのか？

思い上がった三下に格の違いを見せ付ける為、それだけに過ぎない。

羽賀の顔が絶望の色に染まる。

「いいか、二三下。こつから先、テメエの常識は通用しねえ。何一つだ……それが分かったら」

純白の翼が羽賀に向かって振り下ろされる。

「俺とテメエの格の違いに絶望してから逝け」

押し迫る白い奔流

垣根の持つ純白の翼は天使の翼、とも形容すべき美しいもののだが……この時、羽賀雷人には悪魔の翼に見えたという。

こうして、戦いの幕はひけた。

---

#### 第二試験結果

受験生 垣根帝督

犯人役生徒 10名 全て無力化

教官 1名 無力化

暫定ランク S

---

「おー、お疲れさん。思ったより早かったなあ」

第二試験を終え、舞台となった廃墟を出ると蘭豹が声を掛けて来る。

何故かその蘭豹の隣には相も変わらずやる気のなさそうな面を下げた綴もいやがる。



「ステルス使いだったなんて聞いてなかったぞ、垣根」

「言っただけだからな」

別に言う必要がなかったから言わなかったただけだしな。

「しっかし、アレやな！ステルス使いとはいえ試験会場を破壊しながら挑む奴がおるとは思わなかったで！！東京武偵高始まって以来の大物アホやな、垣根は」

ケラケラと笑いながら、バシバシと俺の背中を叩く蘭豹。

痛えし、ウゼエ・・・

つつーか、お前とは初対面だつつーのに馴れ馴れし過ぎだろ・・・  
ウゼエ、心の底からウゼエ

あと、アホはダメエだ。

蘭豹は一通り笑い終わったのか、あるいはウザがつてる俺に気付いたのか・・・背中を叩くのを止め、再び口を開いた。

「まあ、何はともあれ第二試験もクリアっちゅー事で編入試験は無事終了や」

まあ、羽賀だかなんだかを含めた全員を無力化したんだ。当然といえば当然なんだが・・・

「で、結果は？」

「合否や合格時のランクはまた後日知らせる。課報科の服部センセからの報告も踏まえて判断せなあかんしな」

「そうかい」

『んん』の野郎が諜報科の教官つつーのは初耳だが……つつーか、『んんん』うるさいあいつに諜報活動出来んのか？

途中から居なくなつたしよ……

等とどうでもいい事を考えながら返す。

「まあ、悪い結果にはならん思うで。ほなな」

蘭豹はそう言うのと、東京武偵高の方へ去っていった。

「ま、2、3日中には結果を伝えに行くから待っとけ」

綴が例のものを口にしながら言う。

「2、3日ねえ……」

それまでどうしたもんか……

学園島の探索でもするか？

つつーか、今日みたいに病室抜けだせんのか？

等と考えていると、綴も蘭豹に続くように歩き出す。

歩き出した綴の背中をなんとなくが見ていると、綴はこちらに振り返ると口を開いた。

「東京武偵高で待っている」

そう言い残すところを振り返る事なく綴は去っていった。

そして、綴が去つたのを確認すると俺も入院している病院に向かい歩き出す。

目が覚めた時から続く不可解な出来事、時間の齟齬、正体不明の視

線・・・増え続ける謎を再確認し溜息を吐きながら俺は歩を進めた。

そして、2日後綴から知らされた結果は以下の通りだ。

---

編入試験結果      合格

暫定ランク      Sランク

(危険性高い為、要注意)

---

その翌日には、東京武偵高に編入する事となる。

学園都市に戻る手掛かりを探る為、俺の武偵としての活動が明日から始まる。

続く？

余談だが、垣根が行った第二試験は伝説として広まる事となる。  
しい。

試験会場を破壊した受験生がいた、と。

垣根がこの事を知るのはまだ先の話となる。

## 第八・五弾 正体不明

垣根が去ってから暫く経った廃墟内には一人の人物が佇んでいた。

「んん、中々どうして！んん素晴らしい！」

東京武偵高 諜報科教官 服部瞬蔵である。

服部は今回の第二試験において、垣根帝督という受験生の監視を任され、事実監視に当たっていた。

「んん、途中で蘭豹先生からの通信があつた際にはヒヤヒヤしちやいましたか……」

垣根が正体不明の爆発を起こし、異変に気付いた蘭豹からの通信。そして何故かテンションが上がり思わず声が大きくなってしまった。諜報科としてあるまじき失態だ。

「んん、まあ始めから気付かれていたとは思いますが！んん、私もまだまだですねえ！いや、まだまだだね！！ですねえ！！んんんん」

しかし、彼はなんなんでしょうかね！んん！

始めから私の存在に気付くとは……驚きのあまり思わず前屈みになりそうでしたよ！！んん

そうそう、謎といえば……羽賀先生との鬭り合いの中で見せた白い翼。

あれも興味深いですねえ！！んん、私気になります！

無駄に気配消した甲斐があつたつてもんですよ！！

垣根は服部の存在を途中から認識出来なかった……服部の持つ術によって感知されない存在として監視を続けていたのだ。

諜報科のプロ、それが本来の服部瞬蔵だ。

「体力使うからあまり好きじゃないんですけどねえ。ん、彼も彼で私を警戒してたみたいですし。仕方ありませんね!!」

しかし、と服部はヘラヘラした態度から一転真面目に思考し始める。

正体不明の爆発を起こし会場を破壊した垣根・・・

羽賀が放った高威力の電撃を受けても傷一つ付かない垣根・・・

長い諜報活動の中でも見たことのない異常な存在の垣根・・・

そして、極めつけは白い翼。

あの時異様な空気が周囲を包んだ・・・

思わず震えてしまった程に。

あれはこの世界には有り得ない力・・・の筈。

なら・・・彼はもしかして・・・

「ん、・・・事実は小説より奇なりと言いますしね。有り得ないなんて事は有り得ないって奴ですかね！ん、」

そう言う、服部の顔は心底楽しそうだ。

「アレを見たまま伝えるのは・・・面白くないですし！・・・それに、まだ早いですね・・・」

服部は独り呟きながら出口に向かって歩き出す。

羽賀及び気を失った生徒達を引きずりながら・・・

「しかし、彼もえげつないですねえ・・・」

服部は羽賀の両腕を見ながら呟く。

羽賀の両腕は通常では有り得ない方向に振曲がっており、どう見てもかなりの深手を負っているのが分かる。

「んく・・・まあ、どうでもいいか！」

心底どうでも良さそうに言う服部の眼は心なしか冷たかった。

さて、蘭豹先生にはどう報告しますかね・・・んく

白い翼・・・興味深いですが・・・黙っておくのもアリですねえく

！

『彼の實力は大したもんだ！』

『正体不明のステルスを使った！』

『訳が分からないよ！』とでも言っておきましょう！

あ、今のどこぞの地球外生命体みたいですね！

服部は一人納得し、フンフン鼻唄を唄いながら歩みつづける。

「いやく、正体不明のステルスを使う謎の編入生！んく、またまた前屈みになりそうな位テンション上がってきましたよ!!」

そんな事を言いながら出口に差し掛かった辺りで服部はふと違和感を感じた。

ん・・・？誰かいるんですかねく？んく・・・

術を使い周囲を索敵してみるが、何も引つ掛からない。

んく・・・何か居たような気がしたんですが・・・気のせいですかね!!

「んく!!帰って録画したアニメでも見ますかね!!深夜アニメも見ないといけないし・・・んく、時間がない!!」

服部はそう言うと、廃墟を後にした。

廢墟内のとある一角には、正体不明の存在がいた。

その存在は極めて異質な存在・・・この世界にはいるはずのない存在だ。

『……………垣根……………帝督』

垣根の名前を呟くとその存在は笑ったかのようにも見えないが、よく分からない。

「……………んな……………ツダが……………ない……………しかし……………見つけた……………」

言葉は途切れ途切れ。

そんな正体不明の存在は終始、この試験を観察していた。いや、正確には垣根帝督をだ。

何が目的で、何故垣根を知っているのか分からない謎の存在は不思議な事に数瞬するとスツと姿を消した……………

まるで、始めから存在していなかったかのように……………そして、廢墟内に存在するものはいなくなった。

新たな武偵 終わり。

---

登場人物紹介（オリキヤラ）

服部瞬蔵

21歳。諜報科の教官。

かの有名な服部半蔵の子孫。服部家に代々伝わる忍術を活かした諜報活動が得意。



口癖は『ん〜』

アニメヲタクで、影響を受けやすく日常会話の中にもよくアニメのキャラの台詞をよく取り入れる。

ロボット物からハーレム物まで内容は問わず見る。が、基本的には美少女キャラが登場しないとテンションは上がらない。

ハーレム物も好きといえは好きだが、どちらかといえは百合っぽいものが好み。

深夜アニメもリアルタイムで見えており、睡眠時間は短い。

短いが、基本的には常にハイテンション。

理想のタイプ美少女っぽいアニメ声の娘 恋人は二次元

と豪語する。

一部の生徒には人気があるが、

その他の生徒達からはウザがられている。

垣根の第二試験の監視及び報告担当者。

報告内容は以下の通り。

1 認識出来ないステルスを使う。

視識出来たのは正体不明の爆発のみ。

2 戦闘力、状況判断力に秀でている。強襲の適性あり。

3 Sランク相当。だが、性格及びステルスには危険性

あり。要注意する必要がある。

4 試験において、教官を撃退する。

羽賀雷人

25歳。強襲科教官。

強襲科の教官としては蘭豹には劣るが優秀な存在。

ただ、思い込みが激しい一面や頭に血が昇りやすい一面もあり生徒達からはあまり人気はない。

また、普段は丁寧語だが頭に血が昇ると暴言が飛び出る。

ステルスは電撃。

応用が利き、ステルスを使った強襲が得意

垣根に敗れ両腕をへし折られる等悲惨な目に遭った。

垣根との戦闘はトラウマとなっており、何も語らない。

19歳の妻と2歳の娘がおり、家族仲は良好らしい。

サングラスは妻からのプレゼントで常時着用している。

垣根と同じ武偵病院で治療を受ける事になる。